

令和 3 年 8 月 18 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02723

研究課題名(和文)「する」型・「なる」型表現類型に関するルクセンブルク語と他の西欧諸語との対照研究

研究課題名(英文) Contrastive studies on the expression of the DO-type and the BECOME-type among Luxembourgish and other European languages

研究代表者

田村 建一 (TAMURA, Kenichi)

愛知教育大学・教育学部・特別教授

研究者番号：90179896

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、西欧諸語における知覚構文や無生物主語他動構文(いわゆる「する」型表現)の使用頻度の違いを、児童文学作品とその翻訳を通して明らかにするとともに、そうした構文の使用あるいは回避に通言語的な共通性が見られるのかどうかを探った。分析した言語は、ルクセンブルク語、ドイツ語、英語、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、オランダ語、スウェーデン語であるが、これらの言語のうちルクセンブルク語とロシア語には、「する」型表現を回避する傾向があることがわかった。また、全体としてモノ・コトが人に対してネガティブな作用を及ぼす内容の文では、無生物主語他動構文が回避される傾向が強いこともわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日英対照言語学で提唱されている表現類型としての「する」型・「なる」型の概念をヨーロッパ諸語間の対照研究に応用し、一般に「する」型表現を多用するとされる西欧諸語の間でもその傾向の強さに言語による相違が見られること、特にルクセンブルク語には「する」型表現を回避する傾向があることを明らかにした。同じ文学作品の多数の言語への翻訳版、および同一言語でも複数の翻訳版を比較することによって初めて見えてくる各言語の特徴を捉えた点に学術的な意義があると考えられる。また、本研究は「なる」型言語である日本語からの視点に立脚しており、日本発の研究を海外に発信した点に社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： Japanese linguists advocate a typology of the linguistic expressions, according to which languages are divided into two groups; the DO-languages and the BECOME-languages.

West European languages in general, which often use the perceptive construction and the transitive construction with an inanimate subject, belong to the former and Japanese, which does not use these constructions, belongs to the later. This research investigated into the usage frequency of these constructions in European languages (Luxembourgish, German, English, French, Portuguese, Russian, Dutch, and Swedish) based on the analysis of literary works for children and came to a conclusion that of these languages Luxembourgish and Russian tend to avoid the DO-type constructions and these constructions tend to be avoided cross-linguistically in the sentences which express the negative effect of things to a person.

研究分野：対照言語学

キーワード：する型・なる型 表現類型 ルクセンブルク語 知覚構文 無生物主語他動構文

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 表現類型における「する」型と「なる」型

日英対照言語学で提唱されたテーマの一つに、「する」型表現と「なる」型表現の対比がある(池上 1981、安藤 2007 など)。これは、以下の例のように英語では人間が活動したり認識したりする形の表現(「する」型)が多く用いられるのに対して、日本語では人間が背景に後退し、その場面の状況だけが表現される(「なる」型)というものである。

英: I've lost a button. (國廣 1974a: 48)

日: ボタンがとれちゃった。

英: I heard shouting. (國廣 1974b: 48)

日: 叫び声がしたぞ。

英語以外のヨーロッパの言語、特に西欧諸語においても英語と同じように「する」型表現を用いる傾向があるのかどうか、たいへん興味深い問題である。しかし、本研究の開始時点においてはまだこのテーマに関する多言語間の対照研究はなかった。

### (2) ルクセンブルク語について

ルクセンブルク語は、ドイツ語モーゼル・フランケン方言から発展した言語であり、主として話し言葉としてのみ用いられてきた。1984年にルクセンブルクの国語として、またフランス語およびドイツ語と並ぶ公用語として法的に規定されて以降、文章語としての使用も増加している。ルクセンブルク語は、その文章語化のプロセスにおいてフランス語やドイツ語からの影響を強く受けており、れっきとした西欧型言語であるといえる。しかし以下で解説するように、この言語に翻訳された文学作品中において、他の西欧諸語で「する」型表現を使用する箇所では「なる」型表現を使用するケースが多く見られる。

### (3) 申請者による研究開始時点までの研究成果

申請者はそれまで『星の王子さま』と『ピノッキオ』の原作とその翻訳版を材料として、ルクセンブルク語を含めたいくつかの言語の「する」型・「なる」型表現に関する対照研究を行い、以下のことを明らかにした。分析の対象にしたのは、原作において認知を表す動詞(見る、聞く等)をとともう「する」型表現(知覚表現)である。

まず『星の王子さま』においては、そうした「する」型表現の例がフランス語原文では8箇所見出されたが、英語訳とドイツ語訳ではそれらはすべて一貫して「する」型で表されている。それに対してルクセンブルク語訳ではその中の2箇所では「する」型が用いられず、その他は「なる」型に変換されている。日本語訳については9種類の翻訳を比べた結果、訳者による違いは見られるものの全体としては英独仏語よりも「する」型表現の使用が少なく、ルクセンブルク語とほぼ同程度に「なる」型表現への変換を行っていることがわかった。詳細については、3節の(1)で述べる。

ルクセンブルク語における「なる」型表現への変換の例として次の例が挙げられる。

フランス語: Et je fus bien surpris de voir s'illuminer le visage de mon jeune juge:  
(直訳: そして私の幼い批評家の顔が輝くのを見て、私はとても驚いた。)

ルクセンブルク語: An du war ech verwonnert, wéi mäi jonke Kritiker iwwert d' ganzt Gesiicht gelaacht huet: (直訳: そして私の幼い批評家が顔全体で笑ったので、私は驚いた。)

『ピノッキオ』の分析からも同様の結果が得られた。イタリア語原文の「する」型表現(13例)が「なる」型に変換された例は、日本語が9例なのに対して、ルクセンブルク語では11例にも上る。以上の二作品の分析から、ルクセンブルク語が他の西欧諸語とは異なり、日本語のように「なる」型表現を使用する傾向を強くもっていることが明らかになった。

## 2. 研究の目的

上述のようにルクセンブルク語には「する」型表現を回避する傾向が他の西欧諸語よりも強いことが少なくとも二作品の分析から示された。しかしこうした傾向が他の作品においても見られるのかどうかは不明である。本研究の目的は、できるだけ多くの作品に基づき、西欧諸語それぞれの「する」型表現の使用頻度に関する分析を行うとともにその中でルクセンブルク語の位置づけを確認し、ルクセンブルク語に「する」型表現が回避される傾向が確認される場合には、その理由を探ることである。

ルクセンブルク語は、この数十年来の急速な文章語化以前には主として話し言葉としてのみ使用されていたため、多くの動詞の過去形の消失や男性名詞主格と対格の融合、dem Lehrer sein Haus(先生・彼の家=先生の家)のような所有代名詞を用いる所有表現など、ドイツ語諸方言や

日常語 (Umgangssprache) と共通する特徴をもっている。もしヨーロッパ諸語の「する」型表現が文章語的な特徴であって日常的な話し言葉では用いられないとするなら、ルクセンブルク語で「する」型表現があまり用いられないのは、この言語の話し言葉的な特徴を反映する現象であるとも考えられる。これを確かめるには、文学作品の中でも硬い文体を要求するジャンルとそうではないジャンルを分けて分析する必要があるが、残念ながらこれに関する十分なデータを集めるまでに至らなかった。

### 3. 研究の方法

本研究では、同じ文学作品の原文と翻訳版を用いて、同一の内容の文が各言語でどちらの表現類型で表されるのかを探る。具体的には原文の「する」型表現が翻訳においてそのまま用いられるのか、あるいは「なる」型表現等の別の表現に変換されるのかという観点から、各言語における「する」型表現の使用頻度を調査する。作品の選択に当たっては、ルクセンブルク語の翻訳版が存在することが前提となるが、上述のようにルクセンブルク語による(翻訳も含めた)文学作品の刊行が増えるのは1990年代からであり、また言語人口に基づく出版市場の規模が小さいため、その選択肢は限定的なものとならざるをえない。本研究では、古典的な児童文学作品を中心に以下の作品を分析対象とした。『ピノッキオ』『星の王子さま』『不思議の国のアリス』『長くつ下のピッピ』『大どろぼうホツェンプロッツ』『アンネの日記』。

また、ルクセンブルクの作家や文学研究者への聴き取り調査を実施し、本研究の観点や途中までの研究成果について意見を求める。この計画に関しては、作品分析の結果をまとめるのが遅れたため予定よりも少なくなったものの、実施することができた。

### 4. 研究成果

研究期間内に3本の論文を刊行した。すべて本報告者による単著であり、うち2本はドイツ語で執筆した。以下に各論文の概要を記す。

- (1) Kenichi TAMURA, Die Ausdrucksweisen in „Le Petit Prince“ und ihre Übersetzungen in europäische Sprachen und ins Japanische: Unter besonderer Berücksichtigung des Luxemburgischen. 愛知教育大学研究報告、第68輯(人文・社会科学編)、65-78頁、2019年3月[題目和訳:『星の王子さま』とそのヨーロッパ諸語および日本語への翻訳版における表現方法—ルクセンブルク語に焦点をあてて—]

この論文では、サンテグジュペリ『星の王子さま』の原文(フランス語)で使用された「する」型表現(知覚構文および無生物主語他動構文)が、ヨーロッパ諸語と日本語の翻訳版においても同じ構文を用いて訳されるのかどうかを探った。対象とする言語は、フランス語のほか、ルクセンブルク語、英語、ドイツ語、ポルトガル語、ロシア語、オランダ語、日本語であるが、ルクセンブルク語は訳し方の異なる2種類の翻訳を、日本語に関しては入手できた9種類の翻訳を対象とした。

まず、原文で8箇所確認された知覚構文に関しては、それを同じ知覚構文で訳した箇所の数で比べると言語ごとに次のような結果になる。

英語、ドイツ語、オランダ語、ルクセンブルク語 (Lex Roth 訳) : 8  
ポルトガル語 : 7  
ロシア語、ルクセンブルク語 (Josy Braun 訳) : 2  
※日本語の9種類の翻訳の平均値は3.4箇所である。

次に、原文で28箇所確認された無生物主語他動構文に関しては、それを同じ構文で訳した箇所の数を比べると次のとおりである。

英語、ルクセンブルク語 (Lex Roth 訳) : 26  
ドイツ語 : 25  
ポルトガル語 : 22  
ルクセンブルク語 (Josy Braun 訳) : 14  
オランダ語、ロシア語 : 10  
※日本語の9種類の翻訳の平均値は5.9箇所である。

なお、無生物主語他動構文が他の構文に変換された例をひとつ挙げる。

フランス語 : L' idée de troupeau d' éléphants fit rire le petit prince. (直訳 : 象の群れというイメージが、王子さまを笑わせた。)

ルクセンブルク語 (Josy Braun 訳) : Iwwert d' Iddi mat den Elefantent huet de klengle Pränz misse laache. (直訳 : 象のイメージに王子さまはつい笑ってしまった。)

二つのルクセンブルク語訳のうちRoth訳は、ルクセンブルク語を学習するフランス語話者向けの翻訳であるため、意識的に原文に忠実に訳されたと考えられる。日本語においても、フラン

ス語学習のための対訳の形で刊行されている小島俊明訳は、他の日本語訳よりも原文に即した構文の使用がはるかに多い。『ピノッキオ』など他の作品のルクセンブルク語訳も考慮したうえで、Braun 訳の方がルクセンブルク語の特徴を示すと見なすなら、ルクセンブルク語はロシア語とともに他のヨーロッパ諸語と比べて「する」型表現の使用が少ないといえる。

- (2) Kenichi TAMURA, Eine kontrastive Studie über die transitive Konstruktion mit einem unbelebteten Subjekt in „Alice’s Adventures in Wonderland“. 愛知教育大学研究報告、第 69 輯 (人文・社会科学編)、9-18 頁、2020 年 3 月 [題目和訳: 『不思議の国のアリス』における無生物主語他動構文に関する対照研究]

この論文では、ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』の原文(英語)で使用された無生物主語他動構文が、他のヨーロッパ諸語の翻訳版においてどの程度同じ構文で訳されているのかを探った。対象とする言語は、英語のほか、ルクセンブルク語、ドイツ語(3種類)、フランス語、ポルトガル語、ロシア語(3種類)、オランダ語である。参考までに4種類の日本語も調べたが、日本語訳では無生物主語他動構文がほとんど用いられていないことがわかった。原文で確認された32箇所の無生物主語他動構文のうち、同じ構文で翻訳された箇所の数は次のとおりである。

ポルトガル語: 30  
フランス語: 27  
ロシア語: Gnemenko 訳 23、Nabokov 訳 22、Demurova 訳 8  
オランダ語: 19  
ドイツ語: Enzensberger 訳 15、Raykowsky 訳 14、Teutsch 訳 13  
ルクセンブルク語: 10

この作品においてもルクセンブルク語訳では無生物主語他動構文の使用が少ないことがわかる。ロシア語訳に関しては翻訳者による相違が大きいが、Gnemenko 訳と Nabokov 訳は原文に忠実であると思われており、現在の普及版である Demurova 訳にロシア語の特徴が表れていると考えると、ロシア語はルクセンブルク語訳と同様、無生物主語他動構文の使用が少ないといえる。ドイツ語訳においては、『星の王子さま』の訳とは異なり、3種類ともこの構文の使用が多くはない。

『星の王子さま』の分析結果と合わせて考えると、ルクセンブルク語はロシア語とともに無生物主語他動構文の使用を避ける傾向があるといえる。

- (3) 田村建一「無生物主語他動構文の使用に関するヨーロッパ諸語間の対照研究—ルクセンブルク語に焦点をあてて—」『ドイツ文学研究』第 52 号、55-68 頁、日本独文学会東海支部、2020 年 10 月

無生物主語他動構文の中で、例えば「台風が木々をなぎ倒した」のように物体に作用する内容の文の場合は日本語でも違和感なく用いられるため、この論文では、典型的な「する」型表現である「モノ・コトが人に作用する」内容の無生物主語他動構文に分析対象を限定した。この基準で『星の王子さま』と『不思議の国のアリス』に基づくそれまでの研究成果を、分析の対象とする翻訳の種類を若干増やした上でまとめ直し、それにアストリッド・リンドグレン『長くつ下のピッピ』(原文はスウェーデン語)を加えて言語間の無生物主語他動構文の使用頻度を探り、さらに三作品を通してこの構文が使用されやすい文と回避されやすい文の内容について、ルクセンブルク語に焦点をあてて考察した。

『星の王子さま』と『不思議の国のアリス』における言語間の無生物主語他動構文の使用頻度に関しては、それまでの研究とおおよそ同じ結果が得られた。『長くつ下のピッピ』の原文では 12 箇所の無生物主語他動構文が確認されたが、翻訳においてもこの構文が使用されている箇所数は以下のとおりであり、やはりこの作品においてもルクセンブルク語とロシア語にこの構文の使用が少ないことがわかる。

英語: 12  
ドイツ語: 7  
ルクセンブルク語: 6  
ロシア語: 5

文が表す内容と翻訳で用いられる表現類型との関係については、全体として「人を困らせる」「人を恥じ入らせる」「人を空腹にする」「人に何かを忘れさせる」のような人に対するネガティブな作用を表す文が、他の中立的、あるいはポジティブな作用を表す文よりも、原文の無生物主語他動構文を別の構文に変換して訳す傾向がある。特にルクセンブルク語にその傾向が顕著に見られることがわかった(『長くつ下のピッピ』を除く)。ただし、こうした傾向が他の作品でも

検証されるのかどうかは、今後の研究を待たなければならない。

以上の三つの論文では、ルクセンブルク語への翻訳において無生物主語他動構文が他の構文に換えられる傾向が見られる作品を扱ったが、この傾向がどの作品の翻訳においても見られるわけではないことが、様々な作品を分析している中で明らかになった。

例えば、J. K. ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』のルクセンブルク語版（ただし第1～7章）では、30箇所確認される原文の人への作用を表す無生物主語他動構文のうち26箇所が同じ構文で訳されている（ドイツ語版では24箇所）。因みに別の構文に置き換えられた4例のうち3例は、人に対するネガティブな作用を表す文であり、上記の分析結果と一致する。

また、アンネ・フランク『アンネの日記』に関しては、そのドイツ語版からのルクセンブルク語訳が刊行されているが、1944年4月1日から最後の日記までの記述を見る限り、ドイツ語版では人への作用を表す無生物主語他動構文が24箇所確認されるが、そのすべてがルクセンブルク語でも同じ構文で訳されている。一方、『アンネの日記』のルクセンブルク語訳を行った Jeanny Friederich-Schmit 氏は、オットー・プロイスラー『大どろぼうホッツェンプロッツ』（原文はドイツ語）のルクセンブルク語訳も刊行しているが、この作品では原文で確認される17箇所の人への作用を表す無生物主語他動構文のうち8箇所が別の構文への変換がなされている。このことから、作品のジャンルの違い（片や日記、片や児童文学）が翻訳者の用いる構文に影響を与えたと考えられる。英語においても、『くまのプーさん』のように低い年齢層向けの作品では知覚表現も無生物主語他動構文もあまり使用されないことから、「する」型表現の使用は文章語性の程度が低い作品では使用頻度が下がると考えられる。

本節の(1)で扱った Roth 訳のルクセンブルク語版『星の王子さま』に見られるように、他の西欧諸語に近い文法構造をもつルクセンブルク語において知覚構文や無生物主語他動構文を用いることはそれ自体として不自然なものではない。問題はそれをどの程度使用するかということであり、文章語化の歴史がまだ浅いルクセンブルク語では、まだ「する」型表現の使用が他の西欧諸語ほどには一般化していないことが考えられる。

現地調査では、ルクセンブルク語版『ピノッキオ』の翻訳者である Yvett Moris 氏への聴き取りも行うことができたが、彼女はあるイタリア語原文の知覚表現をその場であえてルクセンブルク語に直訳した上で、自分がかつて訳した非知覚表現と比べ、直訳の知覚表現の方には違和感を覚えると断言した。このように、ある種の「する」型表現に関してはルクセンブルク語ではその構文が使えないものもあると考えられる。そうした構文を探し出す作業が、本研究ではまだ中途段階であり、今後の課題である。

#### <引用文献>

- 安藤貞雄『英語の論理・日本語の論理 対照言語学的研究』（大修館書店、1986/2007年）  
池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学一言語と文化のタイポロジーへの試論一』（大修館書店、1981年）  
國廣哲彌 a 「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較」（『英語青年』1974年2月号、48-50頁、研究社）  
國廣哲彌 b 「日英語表現体系の比較」（『言語生活』270号、46-52頁、1974年、大修館書店）

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>Kenichi TAMURA  | 4. 巻<br>69         |
| 2. 論文標題<br>Eine kontrastive Studie ueber die transitive Konstruktion mit einem unbelebten Subjekt in "Alice's Adventures in Wonderland" | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）  | 6. 最初と最後の頁<br>9-18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし   | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）   | 国際共著<br>-          |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>Kenichi TAMURA  | 4. 巻<br>68          |
| 2. 論文標題<br>Die Ausdrucksweisen in 'Le Petit Prince' und ihre Uebersetzungen in europaeische Sprachen und ins Japanische: Unter besonderer Beruecksichtigung des Luxemburgischen | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）  | 6. 最初と最後の頁<br>65-78 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし   | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）   | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>田村 建一  | 4. 巻<br>52          |
| 2. 論文標題<br>無生物主語他動構文の使用に関するヨーロッパ諸語間の対照研究 ルクセンブルク語に焦点をあてて | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>ドイツ文学研究  | 6. 最初と最後の頁<br>55-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                            | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                   | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>田村 建一                                       |
| 2. 発表標題<br>無生物主語他動構文の使用頻度に関する対称研究 ドイツ語とルクセンブルク語に焦点を当てて |
| 3. 学会等名<br>日本独文学会東海支部                                  |
| 4. 発表年<br>2019年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>田村 建一                          |
| 2. 発表標題<br>「する型・なる型」表現類型から見たドイツ語とルクセンブルク語 |
| 3. 学会等名<br>京都ドイツ語学研究会                     |
| 4. 発表年<br>2017年                           |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|                           |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |